谷田部最高速トライアル

ライバルが

①がっちりと握手をかわし喜び合うトラスト大川氏と鈴木氏
②パンクを抜けてくるグレッディソアラを見守る大川氏と鈴木氏
③良きライバルであるＲＥ雨宮の雨さんも国内最速を喜ぶ
④ドライバー井上氏に車の状況を伝える平田氏にも熱が入いる
⑤この日300km／ｈカーの仲間入りをしたオートプライドの高橋氏
⑥思うように記録が伸びず、渋い顔のトライアル牧原氏

どの数字が最高速の限界か、それは誰にもわからない。誰もがその限界に向かってつき進んでいる。その一つの結果が、1986年12月29日、谷田部の最高速トライアルにおいて打ち立てられた。

ストリートカーが、それまでの大目標であった300km／hを越えたのが、1984年12月21日。トライアルのフェアレディZがたたき出した307・955km／hがその記録である。この日はRSヤマモト、トラストも大台を突破し、300km／h元年の幕明けとなった。

この307という記録を破ったのが、トラストのグレッディソアラ。1985年6月3日のことであった。記録は309・278km／h。この時点では、この記録は当分破られることがないだろうと思われていた——。

次なる記録は1986年1月25日。約8カ月後に打ち立てられた。前回、300km／hをクリアしたHKS千葉の手によるフェアレディZによる313・315km／hがその記録である。

そして1986年12月29日——。

もちろんこの11ヵ月の間、最高速へのチャレンジが全く行なわれなかったわけではない。しかし、どんなチャンピオンも、いつかは敗れる時が来るのだ。

この12月29日、いつも、最高速トライアルが早朝行なわれていたのに対し、異例とも言える昼間に行なわれた。そして、ストレートではかなり強い横風と、時折吹く向い風という悪条件もあった。その中で、トラストのグレッディソアラが疾走し、1発で記録を更新し、チャンプの座に返り咲いたのである。その記録は316・066km／h。

300km／hを初めてオーバーしてからはオーバー200マイル（約320km／h）が次なる目標だ、と言う声もあった。その声に、また一歩近づいたのだ。

「どんな記録も次なる記録への過程でしかない」という言葉がある。最高速においても、この言葉はピッタリあてはまる。かといっても、316という数字の価値が落ちるものではない。

今回の最高速で、VG、13Bも300をオーバーし、7M-Gもあと一歩で手の届くところまで来た。クルマも様変わりを始めており、ニューフェイスのショップも増えた。

次なる記録はいくつか、限界へ向けての男たちの挑戦は、これからも続いてゆく。